

第1章 多文化社会コーディネーターの専門性と形成の視点



山西優二

東京外国語大学特任研究員
早稲田大学文学学術院教授

1. 協働実践研究のねらいとその概要

日本の各地域で多文化化が急速に進展しつつある状況の中で、国際交流・福祉ボランティア・特別支援・学校教育・社会教育・日本語教育など様々な分野でコーディネーターの役割が、機能的にも職能的にも注視されるようになってきている。しかし、このコーディネーターの専門性とその専門性形成に関する研究は未だ不十分であり、実践の中からその具体像を明らかにすることが求められているといえることができる。

東京外国語大学多言語・多文化教育センターの協働実践研究プログラムの山西・小山班では、このような状況を踏まえ、テーマを「多文化社会におけるコーディネーターの専門性と形成の視点」とし、2007年度は7人を構成員（山西優二・小山紳一郎を特任研究員、新居みどり・加藤丈太郎をサブコーディネーター、阿部一郎・丹下厚史を研究員、杉澤経子をセンター運営委員）、08年度は5人を構成員（山西優二・小山紳一郎を特任研究員、奈良雅美をサブコーディネーター、丹下厚史を研究員、杉澤経子をセンター運営委員）とする2年間の協働実践研究を進めてきた。

この山西・小山班の協働実践研究のねらいとしては、次の3点を指摘できる。

第1は、基礎研究として、コーディネーターに関する先行研究を踏まえつつ、多文化社会に関連した分野でのコーディネーターに関する多様な動きとその課題を実践の中に探ることであった。第2は、多文化社会におけるコーディネーターの専門性について、中間支援組織である国際交流協会職員を主軸に据え検討を加えることであった。そして第3は、その専門性の形成に向けての視点や形成プログラムのあり様について、実践事例を踏まえつつ検討を加えることであった。また2年間の協働実践研究の大まかな研究日程としては、07年度に上記のねらいの第1と第2に取りかかり、08年度には第2と第3のねらいを絡めながらの研究をつくり出すことを予定した。

07年度の研究成果は、『コーディネーターって、何だ!?!—多文化社会での役割・専門性・育成プログラム—』（シリーズ多言語・多文化協働実践研究6）に整理されているため、その研究報告を参照いただくこととして、08年度の研究の大きな特徴として、研究員自らの実践経験、研究員自らの専門性形成史を研究対象の軸に位置づけ、その実践経験・専門性形成史を自らが語るという方法を取り入れたことが指摘できる。それは、山西・小山班の研究員（小山・丹下・杉澤・奈良・山西）の一人ひとりが、国際交流協会やボランティア協会など中間支援組織のコーディネーター、また市民団体のコーディネーターとして、その期間に長短の差異はあるものの実践を積み重ね、その実践経験のなかで自らの専門性を形成してきた歴史を有していたためである。したがって、この方法では、それぞれの研究員が暗黙知として持っていたものを、自己省察を通して言葉として示し、そしてそれらの言葉を協働して整理していくことが、実践研究の大切なプロセスになっていったのである。

したがって、この08年度の実践研究報告の第一部では、多文化社会コーディネーターの専門性として山西・小山班が提示した「専門性の5つの役割と3つの形成要素」について、まず山西が解説を加えることにしたい。また「研究員自らの実践経験、研究員自らの専門性形成史を研究対象の軸に位置づけ、その実践経験・専門性形成史を自らが語るという方法」の中で研究員から提示された専門性形成のいくつかの視点についても、総論的に解説を加えることにしたい。そしてその論究を受ける形で、この協働研究に携わってきた研究員の3人（小山、杉澤、奈良）が、「多文化社会におけるコーディネーターの専門性と形成の視点」に関して、強調したい点を実践との関連からより明確に語ることを目的に、自らの思い・実践経験・専門性形成史に基づく論考を寄せることにした。それは、「実践者による協働実践研究」のあり様を、研究員一人ひとりが自分なりに示すことを

大切にしたためである。

2. 専門性としての5つの役割と3つの形成要素

07年度以降、協議してきた多文化社会コーディネーターの専門性を山西・小山班として整理すると、図1に示すように、「5つの役割と3つの形成要素」での構造化が可能である。ただ5つの役割は決して並置されるものではなく、「①人と出会い、関係をつくる」を基礎的役割、「②課題を探る」「③リソースを発見しつなぐ」「④社会をデザインする」を構想的役割、「⑤プログラムをつくり、参加の場をつくる」を実践的役割というように構造的に捉えることができる。またそれぞれの専門性としての役割を、構成するものは何かという視点から捉えると、それぞれの役割を可能とするための「価値・思い・態度」「知識」「技能」といった形成要素が浮かび上がる。ただそれぞれの役割のための形成要素の具体的な内容は、多文化社会コーディネーターを取り巻く状況とその業務に応じて個別に練

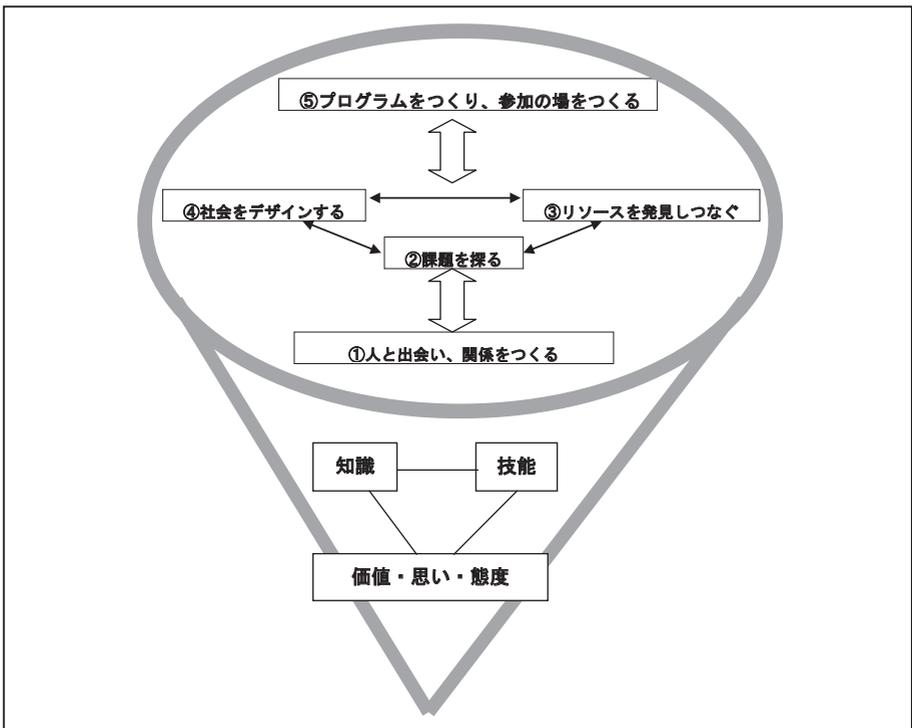


図1 多文化社会コーディネーターの専門性としての5つの役割と3つの形成要素

り上げていくことが求められる。

< 5つの役割 >

①人と出会い、関係をつくる

人として、他者と、出会い、語り、働き、支え、信頼する関係をつくる。

②課題を探る

多文化化・多言語化などに伴う住民や地域の課題から発想しつつ、それらの課題と他地域の状況およびグローバルな社会状況との関連を探る。

③リソースを発見しつなぐ

地域の課題に即した組織的、人的、物的、文化的リソースを発掘し、それらのリソースをつなぐ。

④社会をデザインする

日本にみる多文化社会がこれまでに経験したことがない新しい社会であると捉え、地域課題やニーズから、社会や組織のあり様、その根本原理・価値そのものを問い直し、社会の新しいあり様や仕組みをデザインする。

⑤プログラムをつくり、参加の場をつくる

プログラムづくりを通して、住民が学び、行動し、省察する参加の場をつくり出す。

< 形成要素 >

(i) 価値・思い・態度

多文化社会の現状や課題に関する自らの価値観や思い、また多文化共生に向けての社会変革の必要性などを問い続ける態度

(ii) 知識

社会状況を読み解き、想像的に、創造的にこれからの社会を描くために必要とされる、政治・経済・文化・教育・福祉などそれぞれの関連領域に関する歴史的構造的知識

(iii) 技能

5つの役割を担うための、情報の収集・整理・発信能力、説得力・説明能力・プレゼンテーション力、企画・調整・交渉能力、などの技能

では上記の多文化社会コーディネーターの専門性としての5つの役割について、以下、私なりに若干の解説、考察を加えてみることにしたい。

①人と出会い、関係をつくる

コーディネーターの専門性を語る上で、まずその基礎として、関係性を生きる人間の基本的あり様を踏まえておくことが必要である。つまり、人間は一人では生きられない。人間は、家庭や地域などでの相互に支援され支援する協力関係の中を生活している。また人間は、相互のコミュニケーションを通して相互理解を深め、そのような関係の中で、自己を肯定し、他者を肯定し生活している。そして人間は、政治・経済・文化などの領域での社会活動を通して、世界との関係の中を生活している。

たとえば20世紀後半の世界の教育界に大きな影響を及ぼしたブラジルの教育者、パウロ・フレイレは、「人間として生きるということは、他者そして世界との関わりを引き受けるということである」¹との言葉を残しているが、「引き受ける」という言葉に示される主体性をもって、他者そして世界に関わっていくことの重要性をフレイレは指摘している。

このような関係性を生きる存在としての人間のあり様を基礎に据え、コーディネーターは、まず一人の人間として、他者そして世界と出会い、語り、働き、支え、信頼する関係を、日常の中につくり出していることが求められてくる。

②課題を探る

今日の世界的な社会状況をたとえば「公正」「共生」という視点で捉えれば、貧困、格差と不平等の増大、民族間・宗教間にみられる対立・紛争など、その問題状況は一層深刻さを増していることに気づかされる。一方地域に目を転じると、日本国内でも、地域・階層間格差の拡大、雇用問題、他民族・他文化への差別構造と排他意識、ジェンダー差別など、数多くの問題様相が浮かびあがってくる。そしてこれらの問題は、決して個別に存在しているのではなく、それぞれは関連しあい、重層的に存在している。多文化社会をより公正で、共生が可能な社会としていくには、住民一人ひとりがこのような問題状況に対峙していくことが求められ、また多文化社会コーディネーターには、それぞれの社会の状況、問題状況を、住民生活の視点から重層的に読み解き、他地域の状況およびグローバルな社会状況との関連を配慮しつつ、公正・共生に向けての解決を探っていくことが求められる。

③リソースを発見しつなぐ

全国各地を眺めてみると、「多文化社会コーディネーター」にとどまらず、「学

校教育コーディネーター」「生涯学習コーディネーター」「日本語教育コーディネーター」「ボランティアコーディネーター」「国際理解コーディネーター」などの名称が示すように、官民を問わず、教育・福祉・文化など数多くの領域でコーディネーター職が設置されている。またこれらのコーディネーターの共通した特徴として、従来の事業、領域、組織の枠を越え、それらをつなぐことで、新たな問題状況に対応していこうとしていることが指摘できる。ただその具体的な業務となると、ニーズに基づくボランティアや講師の需給調整から、市民活動と行政事業との連携、NGO・NPO間のネットワークづくり、縦割りになりがちな教育・福祉・環境などの行政事業間での連携・調整、分断しがちな基礎自治体・都道府県・国レベルの行政事業間の連携・調整など、まさに多彩である。

ただ、「連携のための連携」「ネットワークのためのネットワーク」は形骸化し、継続しないことはこれまでも数多く指摘されてきていることであり、そこでは、課題を明確にする中で、課題に即した組織的、人的、物的、文化的リソースを発掘し、必然性の中でそれらをつなぎ、システム・ネットワークを構築していくことが求められている。

④社会をデザインする

日本にみる多文化社会がこれまでに経験したことのない新しい社会であるなら、地域課題やニーズを踏まえつつ、歴史的空間的広がりのある多様な知識・情報の下、社会や組織のあり様、その根本原理・価値そのものを問い直し、一方豊かな想像力をもってこれからの社会のあり様や仕組みをデザインしていくことがコーディネーターには求められる。

かつてミヒヤエル・エンデは、「今世紀（20世紀）に入ってから、ポジティブなユートピアというものがほとんど描かれていない。・・・生きるため、生きるのこるために必要なのは、政治の場でも、文化の場でも、経済の場でもいい。とにかく暮らしてみたいと思えるようなポジティブな世界像をつくりあげるということじゃないだろうか」²と述べたことがある。確かに今の問題状況に窮するあまりか、未来を悲観的に捉え、未来を自由に夢をもって想像することや描くことを避ける風潮は強い。また世界の様々な事象を構造的に捉え、そこに想像力を最大限に働かせ、そしてそこで共有できる価値・仕組みを創造していくことは容易ではない。しかし未来を悲観的に捉える思考から、未来づくりに関わろうとするエネルギーを醸し出そうとすることは難しい。

多文化社会コーディネーターには、まさにこのポジティブなユートピアを描く、

デザインする力が必要とされている。しかしそれは単なる理念上のユートピアにとどまることなく、試行錯誤を繰り返しながらも、実現につながる具体的なユートピアである。このユートピアづくりに向けて、多様な知識・情報、想像力・構想力、デザイン力を有するコーディネーターが果たす役割は大きい。

⑤プログラムをつくり、参加の場をつくる

①～④の過程を経て、多文化社会コーディネーターは数多くの事業プログラムを実施し、住民が学び、行動し、省察する参加の場をつくり出すことになる。この住民参加に関しては、これまでも多くの場でこの重要性について語られてきているが、ここで注視すべきことは、地域課題を重層的に捉えるのと同様、参加をも重層的に捉えるということである。たとえば地域社会というものが政治・経済・文化といった要素を内包していることを考えると、そこにおける社会参加とは、「政治的参加」「経済的参加」「文化的参加」を意味することになる。また参加の対象となる社会活動を「公」「共」「私」という3つのセクターに区分した場合、そこには「公」「共」「私」のそれぞれの活動への参加が浮かびあがる。つまり、社会には主に行政が担う平等性・公共性を原理とする「公」の活動、多様な市民組織・団体が担う協働性・必然性を原理とする「共」の活動、そして企業や個人が担う私益を原理と「私」の活動がある。今、地域社会の崩壊、地域的つながりの希薄化といった表現で問題が指摘されているのは、多くの場合「公」の活動が硬直化し、「私」の活動が肥大化する一方、「共」の活動が崩壊・弱体化している状況に対してである。いま、新たに注目されている民間市民組織としてのNPO・NGOによる社会活動や企業による社会貢献活動は、まさに「共」の再生への動きと捉えることができる。「共」が活性化されることによって、「公」「私」の活動のあり様と3つのセクターの関係も新たな動きを示すことになる。このように参加は、課題と同様、重層的に捉えることが可能である。課題に即した多様なプログラムづくりを通して、住民にとっての多様な参加の場をつくり出していくことが求められている。

3. 専門性形成の視点

山西・小山班のメンバーが、自らの実践経験・専門性形成史を振り返る中で、上記のような多文化社会コーディネーターの専門性の構造化を試みつつ、その専門性を形成する視点として浮かびあげてきたキーワードは、「ずらし」「妄想」「雑学」「振り返り（省察）」「省察的実践の場」の5つであった。「ずらし」とは、多

文化社会という新しい社会を構築するうえで、行政・企業・学校・市民団体などの組織、教育・福祉・医療などの領域などが従来もつ枠をどのようにずらしながらつなげていくのかということの意味している。「妄想」は発想とか想像という言葉とも関連するが、先ほどの「ずらし」のなかで、新しい社会のあり様などをどのようにデザインしていくかということの意味している。「雑学」は、専門的な知識にとどまらず、直接的に業務につながるかどうかかわからないような幅の広い知識・情報が必要であることを意味している。「振り返り（省察）」は、実践を通して専門性を形成していくには、自らの振り返り、また他者との協働の中での振り返りが重要であることを意味している。そして「省察的実践の場」は、自らの活動の場・職場を省察的実践の場にする、実践と省察が交錯する場にするということの意味している。

ただこれらのキーワードは、それぞれの実践の場での課題、その課題に関連した社会状況に応じて、その内実の多様性・重層性を示すものである。後に続く第1部の報告の中で、それぞれの研究員が自らの経験に引き寄せながら専門性やその形成の視点について語っていることもあり、ここでは理念的、総論的に、若干の解説を加えることにとどめたい。

「ずらし」「妄想」「雑学」というキーワードは、多文化社会コーディネーターの専門性の形成において、従来の行政や民間という組織の枠、仕事という業務の枠、専門性という知識・技能の枠、現実・過去という時間の枠などを、時には取り外し、時にはずらし、自由な「拓かれた」状況のもと、想いをめぐらせ、情報を得ることが、いかに重要であったかを示している。特に中間支援組織である国際交流協会やボランティアセンターの専門職であるコーディネーターにとって、半官半民の立場、また上述したように「共」をつくり「共」を活性化する立場を活かすには、従来の組織や仕事の枠にとどまっている中では、創造的なプログラム・事業づくりが難しいことは想像に難くない。数多くの専門職養成のプログラムにおいて、たとえば、教員のみ、行政職員のみ、NGOスタッフのみ、企業人などのみのプログラムよりは、異なる立場の人が参加するプログラムの方が、学びが広がり活性化するとはこれまでも何度となく指摘されてきたことである。個人による「ずらし」「妄想」「雑学」も可能であるが、協働の中での「ずらし」「妄想」「雑学」もまた専門性形成上、必要なプログラムであると考えられる。

一方、「振り返り（省察）」「省察的実践の場」というキーワードは、自らの学び・行動・実践を、自らの振り返りもしくは他者との協働の中での振り返りを通して「深め」、また自らの実践の場を省察的実践の場にするることにより、実践と省察を

交錯させることが、専門性形成にとって重要であることを示している。この振り返りに関しては、後の杉澤の論文に詳しいが、「自己の省察」「当事者同士の省察」「他者（第三者）との省察」という3つの省察のプロセスをプログラムに組み入れることが、学習者に大きな影響を及ぼしうることは、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターによる「多文化社会コーディネーター養成講座プログラム」が示している。

以上のように「ずらし」「妄想」「雑学」「振り返り（省察）」「省察的实践の場」といったことばが示すように、常に自らの思考・感覚・行動を既存の枠組みに閉じ込めることなく、「拓き」、またその状況を常に振り返りを通して「深める」姿勢が専門性の形成にとって必要であることが、それぞれの研究員が、自らの実践経験および専門性形成史を語る中で明らかになってきている。

[注]

¹ パウロ・フレイレ, 1982, 『伝達か対話か』 里見実, 楠原彰, 松垣良子訳, 亜紀書房.

² M. エンデ, E. エプラー, H. テヒル, 『オリーブの森で語りあう』 丘沢静也訳, 岩波書店.